

# 円朝速記のゲス使用相

野村雅昭

【キーワード】 指定表現 待遇表現 ゴザイマス デス 落語

## 1. 指定表現ゲスと落語

インターネットの掲示板やブログをみていると、文末につぎのような表現をもちいている例が目にはいる（下線は野村）。

[01] 毎年初雪はキャイキャイ言うのでですが、次第に雪かきが日課になってくるとウンザリするでげす！  
(2007. 4. 30 Google 検索)

[02] 偏差値の高い有名大学の学生さんたちにはリアリティあるのかな、という感想でゲス。  
(同上)

文末のデスに相当する箇所<sup>1</sup>にデゲスがもちいられている。このような表現は、非常におおいというわけではないが、そうかといって希少例というほどでもない。検索エンジンによっては、すくなくとも10万件をこえる使用例がヒットする。インターネットで発信する30歳代以下の若者たちの一部に、このような表現をこのむ層が存在することはたしかである。普通の文体あるいは話体というよりも、ちょっと気どった、もしくは、斜にかまえた表現であるとみられる。

この(デ)ゲスについて、野村(2006a)では、それが1970年代のテレビコマーシャルに起用された著名な落語家の口癖として話題になったこと、同時期の他の落語家は嘶のなかでほとんどつかっていないこと、明治期の落語家の速記にはよくあらわれることなどを指摘した。また、野村(2006b)では、1970年代以降、これが寄席芸人を主人公にした漫画やほかの漫画の中で特殊なキャラクターをもつ人物の発話につかわれたことが、現在の若者のゲス使用のもとであると推測した。さらに、それにさかのぼって、野村(1980)では、明治期の落語速記にみられる落語家のゲス使用にはかなりのばらつきがあることを、小調査の結果として報告した。

本稿は、それらをうけて、ある程度の量の調査をおえたので、明治期の落語速記におけるゲスの使用状況について報告することを目的とする。また、ゲスの使用層については、近代語研究者のなかには、独自の見解をしめすものがある。それについても、落語速記の分析から、新見を呈示することが可能である。ただし、紙幅の関係ですべてをおさめられないので、本稿では三遊亭円朝の速記にみられるゲス使用を中心にのべる。演芸速記雑誌にみられるゲスの使用状況については、別稿として報告することにする。

## 2. 俗語としてのゲス

このゲスはゴザイマスの変化した形だとされる。発生期のゲスは、おなじくデゴザイマスから変化したデスとその使用相をともにしている。その間の事情を、近代国語辞書の嚆矢とされる『言海』（1889-91=明治22-24）の著者である大槻文彦（1847=弘化4生）は、以下のようにのべている。

「です」わ、随分古くから、つかつて来た語のようであるが、江戸でわ、元と、芸人言葉で、軽薄な口調の「でげす」など、同じもので、明治以前わ、咄家、太鼓持、女芸者、新吉原の茶屋女などに限つて、用いられて居たもので、(中略)それが、今のように、遍く行われるようになったのわ、明治の初に、田舎の武士が、江戸へ出て、柳橋新橋あたりの女芸者などの言葉で聞いて、江戸の普通の言葉と思つて、真似始めたからの事であろう。

(国語調査委員会編／大槻文彦担当『口語法別記』, 1917=大正6, pp. 297-298)

これがデスの起源についての通説となった。大槻が『言海』でデスを見出しにたてなかったことはよく知られている。ただし、その増補版である『大言海』（1932-1937=昭和7-12）では、さすがにデスは採用している。しかし、ゲスは『言海』『大言海』でもにとりあげられなかった。田鍋（2005）によれば、大槻には「東京須覧具」と題する備忘録があり、ゲスもそこに記載されているが、他の俗語とともに採用されなかったとある。

ゲスの使用例は、幕末期からみられる。湯沢幸吉郎（1957）には、[03] [04] 滑稽本『妙竹林話七偏人』（1857=安政4）、[05] 人情本『春色江戸紫』（1864=元治1）などの例があがっている。

[03] 大人御在庵かな、〔私ハ〕石町の変物でげす (七偏人、四中、一五オ)

[04] イヤ八百屋では御座せん (同、四中、一五オ)

[05] 好男子には何がなる。小蠅ゲスね (江戸紫、二、一〇ウ。タイコモチノ言)

(以上3例、湯沢幸吉郎『増訂江戸言葉の研究』p. 446より抄出。下線は野村)

このように、幕末期の戯作には、通人風の男、商人、幫間などのことばとして、ゲスももちいられている。それにつづいて、湯沢は以下のようにのべている。

「げす」は広く一般に行なわれた語ではないが、江戸末期になると、「でげす」が、職人仲間などにはかなり普通に用いられ、明治の初期にも続いたが、やがて「です」に圧倒されるようになったのである。(湯沢幸吉郎『増訂江戸言葉の研究』, p. 446)

すなわち、ゲスはゴザイマスと同様に、デゲスのようにデに接続してつかわれることがおおくなるが、[05]のような用法もあるので、代表させるときにはゲスと称する。ただし、ゴザイマスには「…ガゴザイマス」のように、格助詞につづく用法があるが、ゲスにはない。デスとの対比が問題になるときは、デゲスをもちいる。

明治にはいり、仮名垣魯文（1829=文政12生）が開化の世相をえがいた『安愚楽鍋』（1871=明治4）では、通人風の西洋好きの男、幫間、落語家の3名がゲスをつかっている。なお、以下の引例では、常用漢字は通用の字体をもちいる。変体仮名は現行の普通のヒラガナで

しめす。ただし、「子」は「ネ」とする。ルビは、必要なもののみをしめす。

[06] ひらけねへ奴等が肉食をすりやア神仏へ手が合されねへのヤレ穢れるのとわか  
らねへ野暮をいふのは窮理学を弁へねへからのことでげス

(『安愚楽鍋』・初編, 7ウ, 西洋好きの男)

[07] モシあなたはとういふ腕を出して婦人をおころしなさるのでげス

(同・初編, 20オ, 幫間)

[08] ヲツトあぶねへすんでに鍋がとんぼをかへるとこでげした

(同・三編上, 26オ, 落語家)

この3人の用法は、前記の湯沢の解説と一致する。全体の口調からみて、幕末の戯作に登場する人物とかわりはない。飛田良文(1992, pp. 191-192)には、上の『安愚楽鍋』のほか、魯文の『胡瓜遣』(1872=明治5)にゲスを「遊里さかり場の通言」としていることの指摘がある。

明治20年代になると、作品中の人物にゲスをつかわせるだけでなく、ゲスに対する一種の評価をうかがわせるものがみられる。筆者の二葉亭四迷(1864=元治1生), 饗庭篁村(1855=安政2生), 幸田露伴(1867=慶応3生)は、いずれも江戸時代のうまれであるが、作中の記述は発表当時の実態を反映しているとみられる。

[09] 「チョイと〜本田さん取て一間を呈すオホ、<sup>あなた</sup>貴君は何ですネ口には同権論者だ〜と仰しやるけれども虚言<sup>うそ</sup>ですネ

「同権論者でなければ何だと云ふんでゲス

(四迷『浮雲』・二編第十回, p. 93, 1888=明治21)

[10] 身形も奇麗に、いつの間にか東京詞となり、何も交際でゲス、是非同行し玉へ  
杯と此方より誘ひ出すほどの強者となれり、嗚呼世に種々なる言詞あり、左れ  
ど、でござるとか、でござりますとか云ふべきを、否に気取りて、「デゲス」  
杯と唸る者に、確なるは一人もなし、

(篁村『煩惱の月』・第一回, p. 441, 1890=明治23)

[11] 類をもつてあつまる悪友同志、互ひに通とか粋とか乙とか妙とかいふやうな怪  
しき意味を持てる言葉を放ち合ひて、軽薄きはまる盃酒の交りを結び、どうも  
是は恐れ入りやした、凝つたもので、珍でげす、<sup>おもろ</sup>面黒い、たまらねえ、渋うが  
す、捻つた奴などいへる文句を吐きては、

(露伴『迷霧』・上, p. 541, 1890=明治23ごろ)

[09] の『浮雲』でゲスをつかっている本田昇は、学校を卒業して問のない官員である。同僚だった内海文三のいとお勢と会話をかわしている。引用部分のすぐあとでも、文三の問いかけに対して「何でゲス」という答えを発している。これまでの使用人物とことなり、知識階層である。これは、芸人の口調をまねた冗談まじりの、あるいは、からかい半分の発話とみられる。

[10] の主人公は、地方から上京し、官員になることをめざし、学校で勉強中である。いわゆる書生であるが、遊びの世界に心をうばわれてしまう。[11] の主人公は、財産家

の養子となったが、遊蕩に身をもちくずす。これらの主人公に対し、作者である篁村と露伴は批判的である。ゲスをつかう階層がこの時期には特定され、それをまねする人物に対する否定的な口ぶりが共通している。

『浮雲』の本田昇は、この兩人とはちがいが、すでに社会人として地位をしめているが、内向的で世渡りがへたな内海文三とは対照的に社交性にむ人物としてえがかれている。その軽薄さを強調するために、作者は昇にゲスをつかわせているとみることができる。ただし、小島俊夫（1974）は、これを書生ことばのなごりとみて、ゲスを知識階級のことばの一種とみる可能性を示唆している。それについては、後段でふたたびふれる。

時代がくんだり、明治も末期になると、ゲスの使用は文学作品にすくなくなる。その例外が夏目漱石（1867=慶応3生）の『坊つちやん』（1906=明治39）である。『坊つちやん』には、主人公とおなじ東京生まれの画学の教師が登場し、さかんにゲスを使用する。

[12] 画学の教師は全く芸人風だ。べら〜した透綾の羽織を着て、扇子をばちつかせて、御国はどちらでげす、え？ 東京？ 夫りや嬉しい、御仲間が出来て……私もこれで江戸つ子ですと云つた。（漱石『坊つちやん』・二、p.267）

[13] 野だが、鈴ちゃん逢いたい人に逢つたと思つたら、すぐ御帰りで、御気の毒さま見た様でげすと相変らず嘶し家見た様な言葉使ひをする。（同・九、p.366）

この教師に、主人公は「野だ」というあだ名をつける。これは、「のだいこ（野幫間=さだまった芸者屋に籍をおかない下等のたいこもち）」の略称からきている。それは、上の引用の「芸人風」「嘶し家見た様な」という表現とも通じる。つまり、「野だ」の使用するゲスは、『安愚楽鍋』の幫間や落語家の系列上にあるものである。それをつかう教師である「野だ」は、通人ぶったことばづかいをする教養層ということになる。

この「野だ」のことばづかいについて、興津要（1968、p.144）は落語家の初代（正確には三代目）三遊亭円遊（1849=嘉永2生）の幫間が登場する嘶の口調を模したものであると指摘している。明治20年代前半の正岡子規あての書簡には、寄席や円遊についての言及がしばしばみられるという。また、『漱石全集第2巻』（岩波版、1966）の注解（p.913）には、『坊つちやん』執筆時の明治39年3月8日付寺田寅彦あて書簡に「あまりたのまれるのもよしあし、でげす」と、ふざけた口調のゲスの使用がみられるとの指摘がある。

この円遊は、落語家のなかでも、ゲスの使用がおおかったようである。詳細は別稿でしめすが、野村（2004、p.6）で報告したように、上・下にわけて演じた「成田小僧」という嘶で、円遊はマクラなどの地の部分で、自分のことばとして、ゲスを2回もちいている。また、主要登場人物9名のうち、幫間2名、大店の番頭と小僧の計4名にゲスをつかわせている。明治20年前後に寄席通いに熱中した漱石には、円遊の語り口がしっかりと耳にしみこんだにちがいない。

漱石作品のゲス使用は、このほかに『明暗』（1916=大正5）にみられるだけである。[14]では、湯河原とおほしき温泉場の旅館の番頭がつかっている。これが円遊の商家の番頭などの使用と通じるものか、この土地の言語使用をうつしたのかは判然としない。

[14] 「いえ、御覧の通り平地の乏しい所でげすから、地ならしをしては其上へ建て

建てして、家が幾段にもなつて居りますので、(下略)』

(漱石『明暗』・一七八, p. 643)

このように、幕末から明治にかけて、ゲスは芸人や通人氣どりの人物につかわれ、それをまねする書生などにもちいられたとみることができる。このみかたを裏づけるものとしては、時代はくだるが、国文学者岩本素白(1883=明治16生)の回想がある。

引手茶屋何屋の息子は、もう卒業生であつたかも知れない、在校生をまぜた同窓会の席上で、一席やつたことがあつた。何々でげしてといふ口調は、今も落語でやる太鼓持ちか、わるく通がつて居る昔の若旦那そつくりであつた。(下略)

少し話が横道へはいるが、〈げす〉〈ごす〉〈がす〉などいふ言葉は、いやみな言葉である。然しずつと後年になつて元身分も高く学者でもある江戸ツ子の中老人が〈直うごすか〉と云つたのを聞いたことがあつたが、流石にげす、がすを其の人からは聞かなかつた。(岩本素白「東海道品川宿(二)」, 1958, 『素白随筆』 p. 331より引用)

素白は麻布の生まれで、宿場町の品川で育つた。この回想は明治20年代のこととして、のべられている。ゴス、ガスは、ゲスとおなじくゴザイマスからうまれたものである。ゴスは、『安愚楽鍋』では、[06]の西洋好きの男のほか、藪医者が使用している。ゲスとはやや位相を異にするとみられる。しかし、概して「いやみな言葉」とする素白の感想は、ゲスについての同時代人の評価をしめすものであつたとみられる。

### 3. 武士のつかったゲス

ゲスの位相を、以上のようにみるうえで問題になるのが、E. SATOW の『KUIWA HEN (会話篇)』(1873=明治6)に記載される、武士の使用したとみられるゲスである。この『会話篇』は、イギリスの外交官 E. SATOW がみずからの習得した日本語および日本人編集補助者の助言による用例により、外国人の日本語学習書として編纂されたものである。Part I は会話例および英訳からなり、Part II にはその注解 (NOTES AND PARADIGMS) をおさめる。

『会話篇』のゲスの使用例は、以下の6例である。

[15] 1. Koré kara kanji wo o manabi ni naru ni tsuité, sakujitsu jibiki wo motomé-mémashité motté sanjimashita ga, koré de ges'. (EXERCISE XX, p. 100)

[16] 1. Konnichi wa yô kaisei itashimashita.

2. Sayô dé ges'. Makoto ni kekkô na o tenki dé. (EXERCISE XXIII, p. 128)

[17] 5. Amagoi no shirushi ga kiita to mieté omoi-gakenai jibun na yûdachi dé ges'. (EXERCISE XXIV, p. 136)

[18] 9. Rai ga itashimasu. Shikashi koré dé suzushiku narimashô.

10. Sayô dé ges'. Hidoku musu to omoimashitara, tôto yatté mairimashita.

(EXERCISE XXIV, p. 136)

[19] 28. Soré wa, soré wa; nani go yô dé kono tabi wa. Shité mata go shiut-tatsu wa ikka goro ni.

29. Sayô dô ges'. Tabun rai-getsu futsuka mikka no koro ni narimashô.

(EXERCISE XXV, p. 148)

[20] 46. Shikkei dé ges' ga, sono kasa wo dôka.

(EXERCISE XXV, p. 152)

この [15] の英訳には、この話者を Teacher とし、漢字をおしえる人物としている。ゲスには、以下の注記がある。

Ges, corruption of *gozaimasu*.

(Part II, NOTES EXERCISE XX, p. 123)

また、[19] [20] のあがっている EXERCISE XXV の冒頭には、以下の注記がある。

The speakers are of the *samurai* class.

(Part II, NOTES EXERCISE XXV, p. 160)

これらから、ゲスがゴザイマスの音訛と意識されていたこと、すくなくとも [19] [20] については、武士のこぼとしてとりあげられていることがわかる

これに関して、小島 (1974) は、この人物がゴザイマスやキミ・ボクを使用することから、武士や知識人がゲスを使用した例とみてよいとする。また、SATOW の回想録から、SATOW に日本語をおしえたのは、紀州和歌山出身の医師、小笠原家の元家来、阿波の大名の家来、医をまなぶ男などだと推定する。そして、[15] の例について、つぎのようにのべる。

サトウ自身の経験にちかい事例であるとすれば、武士 (浪人)・医師・文人などによって、まじめな (言語行動の)〈場〉で、「でげす」がもちいられていたことになる。

(小島1974, p. 280)

さらに、人情本にも上層町人の使用例がみられることにふれて、以下のようにのべる。

『会话篇』に、「でげす」が、かなりおほばに収録されているのは、サトウによって、知識人や武家階級のことばとみとめられたことによるのではないかと、おもわれる。『西洋道中膝栗毛』の通辞通次郎や、『浮雲』の官員本田昇が「でげす」をつかって、ふざけているのは、幫間などのまねをしているともかんがえられるが、書生ことばとしての「でげす」をつかっているのかもしれない。

(同, p. 281)

SATOW がこのような認識をもっていたという小島の推測は、あたっているとみられる。なぜならば、のちにみるように、円朝の作品にも、武士階層の使用例がみられるからである。上記の [16] - [18] の発話者がだれであったかはわからないが、知識層のものであることは、たしかである。ただし、小島がいう、ゲスが書生ことばであったということの証明はむずかしい。書生層のなかにゲスをふざけてつかう者があったことは、前掲の篁村の引例からも察せられるが、書生ことばだと断定するだけの材料は不足である。

ゲスが武士階層の用語であったということがみとめられるとしても、明治期になると、知識層の使用例は、さきの『浮雲』や『坊つちやん』のほかにはみあたらない。しかし、随筆などで、二種類のゲスがあることを指摘するものもある。劇作家の岡鬼太郎 (1872 = 明治5生)、画家の鏑木清方 (1878 = 明治11生)、演芸作家の正岡容 (1904 = 明治37生) などである。

「ゲス」、「ゴス」と云ふ言葉あり。近頃の人は、噺家太鼓持の特有語の如く思へど、これは堅気の町家の主人なども普通に用ひしものなり。勿論最初は通人連の意気がり

なりしならんも、後には、「御座います」の真面目なる略語となりて、江戸生れの老人間には今も遺れり。(岡鬼太郎「移易雑談」, 1924=大正13, 『鬼言冗語』 p. 36より引用) ぞす。げす。これは、何々でといふ言葉のあとにつくののだが、字にかくとハツキリしてふが、ごく軽く出るので、大店の商人だの、粋な人のくだけた、世慣れた物言で、げすは寧ろゑすにきこえる。助六の「冷えものでエす」、あすこいらから来てゐる蔵前の札差あたりの用語ではなかつたのだらうか。いやみな通人のげすは、やはり助六の狂言に出る通人の「恐れべでゲス」といふあれになる。

(鑄木清方「明治の東京語」, 1935=昭和10, 『鑄木清方文集』 pp. 301-302より引用)

〇〇(で) げす 「ごぞいます」の意味の崩した江戸語。「何々でぞす」ともいう。

(中略: この部分に上掲の「明治の東京語」を引用)

「げす」は明治の落語家——ことに初代三遊亭円遊の幫間物や「五人廻し」の通人などにつかわれ、後者は下町の旦那衆がつかつたが、一般人がつかうときは「げ」「ご」が強くなかつたから、イヤ味にひびかなかつた。

(正岡容『明治東京風俗語事典』, 1957=昭和32, p. 76)

これらからは、ゲスやゴスが上流の商家のあるじなどの一般人にもつかわれたことが察せられる。また、前掲の岩本素白の記述からも、ゲスよりはゴスのほうが上品であつたことがうかがわれる。さらに、発音にも、俗語のゲスとは微妙なちがひがあつたようでもある。このゲスが武士のつかつたゲスの末流であるとは断定できないが、俗語のゲスとはことなるゲスが明治以降の東京にはのこつていたとみることができよう。

## 4. 円朝作品のゲス

### 4.1 調査対象とした円朝作品

三遊亭円朝(1839-1900=天保10-明治33)は、江戸末期の寄席で、道具入り芝居噺で人気を博した。明治になり、円朝は芝居噺をすて、扇子一本の素噺にもどつた。円朝の才能は、話術のたくみさもさることながら、多数の人情噺の創作に発揮された。おもなものに、怪談噺—『真景累ヶ淵』『怪談牡丹灯籠』、伝記物—『塩原多助一代記』、翻案物—『名人長二』『錦の舞衣』、その他—『文七元結』『死神』などがある。

1882(明治15)年に田鎖綱紀は、日本の速記法を創始し、発表した。田鎖の門人若林珪蔵と酒井昇造は、速記の実用性の普及と宣伝をはかるために、円朝の噺を速記にうつしとり、それを出版することを企画した。1884(明治17)年に刊行された、三遊亭円朝演述・若林珪蔵筆記『怪談牡丹灯籠』がそれである。これをきっかけとして、つぎつぎに円朝の口演速記が刊行された。

以下では、円朝の創作人情噺の速記から、下記の5作品をゲス使用の調査対象とする。末尾の〔 〕内にしめたのは、本稿でもちいる略称である。

- ・怪談牡丹灯籠 全21回 若林珪蔵速記 1884=明治17 東京稗史出版社  
和装13冊本(復刻=『名著複製全集 近代文学館』1968による) [牡丹灯籠]
- ・西洋人情話英国孝子ジョージスマス之伝 全8編 若林珪蔵速記 1885=明治18

速記法研究会 和装8冊本 [孝子伝]

・ 欧州小説黄薔薇 全60回 石原明倫速記 1887=明治20 金泉堂 [黄薔薇]

・ 真景累ヶ淵 全97席 小相英太郎速記 1888=明治21 発行者 井上勝五郎

印刷者 鈴木金輔 和装3冊本 [累ヶ淵]

・ 松と藤芸妓の替紋 全7席 酒井昇造・佃与次郎速記 1889-90=明治22-23

『花筐』第1号-第8号(第一席と第二席は、復刻=『定本円朝全集 巻2』1963世界文庫刊による) [松と藤]

このうち代表作の『牡丹灯籠』と『累ヶ淵』は、江戸時代を舞台としている。それに対し、他の3作品は明治開化の社会を描写している。速記のもとになる口演は、ほぼ刊行と時期をおなじくするとみられる。しかし、噺の舞台となる時代がそれよりも以前のものになるほど、その時代の言語使用を反映している度合いがひくくなることは否定できない。また、作品が成立した時期も、作品の言語使用の状況に微妙にかかわる。そこで、なるべく明治期を背景としているものを取りあげ、江戸期を舞台としている2作品をくわえることにした。

#### 4.2 ゲス使用の概況

まず、噺の舞台となっている時代(A)の順に、成立時期(B)、口演/刊行時期(C)、作品中のゲスの延べ使用回数(D)、『円朝全集』のページ数(E)をしめす。創作年代は、永井啓夫(1998)を参考とした。Aについては、おおよその推定をふくむ。

	A	B	C	D	E
牡丹灯籠	寛保3年-宝暦年間 (1743-1764)	文久元年-元治元年 (1861-1864)	明治17年 (1884)	3	269
累ヶ淵	安永2年-寛政11年 (1773-1799)	安政6年 (1859)	明治21年 (1888)	88	396
松と藤	明治4-6年 (1871-73)	不明	明治22-23年 (1889-90)	28	93
孝子伝	明治4年以降 (1871-)	不明	明治18年 (1885)	4	112
黄薔薇	明治10年以降 (1877-)	不明	明治20年 (1887)	0	165

顕著な特徴として指摘できるのは、作品によるゲスの使用回数のばらつきがきわめて大きいことである。Eにしめたように、作品の分量はかなりことなる。しかし、それとゲスの使用回数は、まったく比例していない。『累ヶ淵』の使用回数が最多であることは納得されるが、それ以外の作品の分量と使用回数とのあいだに、相関はみられない。作品の内容などと関係があるとみなければならぬだろう。

『松と藤』以下の開化物3作品では、『松と藤』にかなりの使用がみられ、他の2作品はすくない。『黄薔薇』には、1例もみられない。この理由は、推測しやすい。『孝子伝』と

『黄蔷薇』は翻案物でもある。ヨーロッパの話を開化の世相にあてはめて脚色したため、ゲスをつかうような人物が登場しにくくなっている。ことに後者は、政治家が主人公であるだけに、いっそうゲスはあらわれにくい。『孝子伝』の4例は、いずれも [21] の同一人物による使用例である。

[21] 書ければ鳥渡郵便の一本も出すんでげすが。どふも人を頼みに行のもきまりが  
悪くて  
(『孝子伝』・一、8ウ、西洋床の職人→旧知の士族)

『松と藤』は、芝居噺としても演じられたとつたえられる人情噺である。事件の年代が限定されていて、旧幕時代のなごりをとどめる維新後まもない開化の世相がえがかれる。ゲスをつかう人物は、下記の3人である(右下の数字は使用回数)。

幫間<sup>21</sup> 人力車夫<sup>6</sup> 洋物屋の番頭<sup>1</sup>

[22] 母親さん今日は、お留守でげすか……美代ちやん今日は  
(『松と藤』・二、p. 531, 幫間→芸者置屋の女主人)

[23] 直に其蠟燭屋の裏を御這入りなさんと井戸の前の処が入口でげすから  
(『松と藤』・四、『花筐』6, p. 63, 番頭→車夫)

[24] 何処なんですか四ツ谷の方にへい小哥も牛込の方へ帰りでげすが  
(『松と藤』・五、『花筐』7, p. 88, 車夫→客)

[25] へ、彼の時に小哥ア……奥州屋を殺して貴郎金工奪たんでげす  
(『松と藤』・六、『花筐』8, p. 102, 車夫→葉茶屋の主人)

幫間がゲスを多用するのは、当然のことである。[23] で番頭が車夫に対してつかっているのは、この車夫が主人の妻の兄であることを知っているからである。大店の番頭でもゲスをつかうことがあるのがこれでわかる。

問題は、車夫である。実は、この車夫は元御家人である。身をもちくずして、今は車夫となっている。たまたま殺人の現場にいわせ、[25] の葉茶屋の主人がその犯人だろうとゆすりをかけている。この葉茶屋の主人は、元旗本である。車夫がゲスをつかうのは、江戸時代に駕籠屋がゲスをつかうのと同様である。つぎの [26] ではガスもつかっている。ガスは、「ようがす」のような慣用的な表現をのぞいて、上層の人物はあまりつかわない。

[26] 小哥が持て居たつて仕様がねえんでがすが  
(『松と藤』・五、『花筐』7, p. 95, 車夫→客)

この車夫のゲス使用が下層の人物のそれにとどまるのか、幕臣とはいっても下級の御家人であったことが関係しているのかは、簡単には判断できない。

開化物といえる3作品にくらべて、怪談噺の『牡丹灯籠』と『累ヶ淵』のゲス使用の分布の差異は目をひく。どちらも、江戸時代の出来事をテーマとし、江戸時代につくられている。速記のもとになった口演が成立時そのままでないことは、容易に察せられるが、口演の時期におおきなちがいがないだけに、説明が困難である。『牡丹灯籠』の背景となっている時代にゲスはまだまだあまり使用されていず、『累ヶ淵』のころにはつかわれるようになっていたとかんがえるのも無理がある。『牡丹灯籠』の使用例は、以下の3例である。

[27] 又一人が「なんでゲスネー「左様サ刀剣を買ふとか買はないとかの間違ださう

- です (『牡丹灯笼』・一、3オ、町人→町人)
- [28] 米「平日は妾と嬢様ばかりですから淋しくつて居る所誠に難有う御座います 志丈「結構な御住居でげすナ (『牡丹灯笼』・二、9オ、医者→女中)
- [29] 新「野暮だノウ色にはなまじ連れは邪魔ヨ 伴「イヨお洒落でげすネ宜うがすネー (『牡丹灯笼』・四、19オ、下男→主人)

[27] は、武士のけんかをとりかこんでみている町人どうしの会話である。[28] の志丈は、いわゆる帮間医者である。旗本の娘付きの女中に対することばであるが、もともとゲスの使用層としてごく普通の人物である。[29] は、浪人の萩原新三郎に対する下男伴蔵の発話である。[27] はともかくとして、志丈や伴蔵は、このあとも登場する。伴蔵は、脇役として重要な位置をしめる。しかし、ふたりともゲスをつかうことはない。これは、不自然というよりほかはない。

この疑問に対する解答は、速記本『牡丹灯笼』の成立に関する事情に帰するとおもわれる。清水(1983)は、『牡丹灯笼』十三冊本には、口演者や速記者にはかんがえられない誤謬や錯誤が存在することを指摘し、第三者の加筆がその原因であることを示唆している。それがあっているとすれば、その加筆が表現にもおよび、後段では文章がととのえられた可能性も否定できない。そのことは、演芸速記雑誌における、速記者による文字化の姿勢のばらつきにもうかがわれる。それについては、別稿であらためてふれることにする。

#### 4.3 『真景累ヶ淵』のゲス使用

『牡丹灯笼』と比較すると、『累ヶ淵』ではさまざまな人物がゲスをもちいている。これは『累ヶ淵』が長編であることにもよるが、円朝の綿密な人物描写の反映であるとみることもができる。『累ヶ淵』のゲス使用者は、以下のとおりである。

- [武士グループ] 深見新五郎<sup>2</sup> 山倉富五郎<sup>35</sup> 貞藏<sup>18</sup>
- [遊び人グループ] 深見新吉<sup>12</sup> 土手の甚蔵<sup>8</sup>
- [町人グループ] 皆川宗悦<sup>5</sup> 勘蔵<sup>3</sup> 駕籠屋<sup>3</sup>
- [その他] 落語家<sup>1</sup> 一般人<sup>1</sup>

『累ヶ淵』の筋は複雑で、とても短文で要約はできない。このゲス使用者について、簡略にふれておく。旗本深見新左衛門は、家計が逼迫し、金をかりた按摩宗悦を斬殺する。新左衛門は、役目の上から不慮の死をとげ、深見家は改易となる。新左衛門には、新五郎、新吉の二子があるが、新吉は門番勘蔵にそだてられる。宗悦の遺児である富本の師匠豊志賀とお園の姉妹は、新吉、新五郎と因縁をむすぶ。豊志賀を見殺しにした新吉は下総羽生村へにげ、遊び人土手の甚蔵にたすけられる。新吉は富農三蔵の妹お累の婿になるが、庄屋惣右衛門の妾お賤とふかい仲になり、惣右衛門をころす。ここまでが前段である。

後段は、敵討ちを中心とする展開となる。惣右衛門の跡取り惣次郎は、お隅を後添いにむかえる。お隅に横恋慕している剣術遣い安田一角は、山倉富五郎とはかり、惣次郎をやみ討ちにする。お隅は惣次郎のあだをうとうとするが、一角に返り討ちとなる。惣次郎の友だちである相撲取り花車重吉は、惣次郎の遺子惣吉をたすけ、一角一味をうちとる。

深見新五郎は、改易のときに21歳である。質屋に奉公し、あやまってお園をころして逐電するが、江戸にたちもどる。新五郎のゲス使用は、2例ある。

[30] 園「新どん御願ひだから彼方へ行て下さいな病気に障り升から新「へエー左様でげすかと、締て立て行く（『累ヶ淵』・九、p. 30、新五郎→お園）」

[31] 新「誠に濟ないがツイ踏で二ツ潰したからは私が買つて跡は元のように積で置升彼の庖丁は何でげすナ（『累ヶ淵』・一三、p. 41、新五郎→荒物屋女房）」

[30] は、武士をすてて商家の奉公人となった新五郎の朋輩に対する物言いともみられる。しかし、[31] は捕り手におわれ、とびこんだ荒物屋の店先での対話であり、新五郎は武士姿にもどっている。しかも、すぐあとでは、 DEAL をもちい、[32] のようなことばづかいをしている。貧乏旗本の総領である新五郎は、ゲスをつかっていたとみられる。

[32] 新「ヤレ〜是は〜（中略）拙者は深見新五郎で有が仔細で暫く遠方へ参つて居たが（『累ヶ淵』・一三、p. 42、新五郎→荒物屋女房）」

いちばんゲスの使用例のおおい山倉富五郎は、千百五十石取りの旗本の用人のむすこと称している。主家は改易となり、浪々の身だが、当人は武士のつもりである。

[33] 富「私は大変酔ては居り升が富五郎も武士でゲス御当家の旦那様に助けられた事は忘却致しません（『累ヶ淵』・六一、p. 201、富五郎→惣次郎の母）」

[34] 富「(略)彼の隅なるものに先生思召が有たのでゲスナ前に惚れて被成入たのでゲスナ貴方（『累ヶ淵』・六一、p. 204、富五郎→安田一角）」

貞蔵は一角の門弟であるが、武士かどうかは、はっきりしない。武士でなくても、剣術遣いの門人になることは、すくなくなかったからである。

[35] 貞「でげすから彼れは先生いけませぬ、(中略)サウ言ふ料見違ひナ奴でげすからナア（『累ヶ淵』・七五、p. 254、貞蔵→安田一角）」

これらの武士グループのゲス使用が E. SATOW 『会話篇』の武士の用語とかさなるかどうかは、即断できない。『会話篇』の武士のことばづかいは、概して『累ヶ淵』の武士よりも丁寧である。しかし、その可能性をまったく否定することはできないだろう。

新吉は、2歳のときから勘蔵に養育された。したがって、自分を侍とはおもっていないし、勘蔵のタバコ商をつたうだけで、定職をもっていない。新吉がころがりこんだ羽生村の甚蔵は江戸からの流れ者で、土手の小屋にすみ、ばくちをなりわいとしている。

[36] 豊「何だか誠に訝しく淋しい晩だネ新「へエー訝しく淋しい晩でゲスネ（『累ヶ淵』・一五、p. 48、新吉→豊志賀）」

[37] 甚「ナニ口外しねえから言へヨ新「本当でゲスカ甚「為ないヨ（『累ヶ淵』・二六、p. 84、新吉→甚蔵）」

[38] ネエ否でゲスカ、エモシ、といやにからんで云がかり升も（『累ヶ淵』・二九、p. 96、甚蔵→三蔵）」

[39] 姉さん願ひでげすが些と許り小遣をネー（『累ヶ淵』・四九、p. 162、甚蔵→お賤）」  
新吉や甚蔵がゲスをつかうのは、自分より上の立場にある者や自分が恩恵をうけることを期待する相手に対するばあいがおおい。その点で、一般人の使用とはすこしことなる。

宗悦や勘蔵は、デスよりもやや丁寧ないかたとしてゲスをもちいているようである。

[40] 何でげすか金を借りて置きながら催促に来ると切捨ても好いと仰まうしやるか

(『累ヶ淵』・一, p. 7, 宗悦→深見新左衛門)

[41] トン〜 勘「へエー何方どなたでゲス (『累ヶ淵』・一九, p. 64, 勘蔵→長屋の者)

以上のほか、『累ヶ淵』には、マクラの中でつかわれた例があるが、説明は省略する。そのうち1例は、円朝ないしは同業の落語家のつかう語としてあらわれる。ただし、円朝はほかの斬をふくめ自分の地のことばとしてゲスをつかうことは決してない。

## 5. まとめ

最後に、指定表現ゲスの使用相について、以上に詳述できなかったことをふくめ、その特徴をまとめておく。

- ・ゴザイマスから変化したゲスは、ほとんどがデをとめない、(デ)ゲス {ゲシタ・ゲシテ・ゲシヨウ・ゲセン} の形でつかわれたが、形容詞につづく用法もあった。
- ・デスとことなり、ゲスの使用者は男性にかぎられ、江戸・東京以外の出身者につかわれることはすくなかった。
- ・発生期のゲスはデスとともに品位のとほしいものとして意識され、幫間・落語家・医者など特殊な階層の用語となったが、一部の武士および庶民でもつかう者があった。
- ・明治期以降、ゲスは衰退にむかったが、デスの普及にともなう待遇価値の上昇もあり、デスより丁寧な表現として、一部の知識層・上流商人には使用された。

このような特徴は、明治期の落語速記雑誌の調査によっても確認できるが、円朝以外の落語家の使用状況については、別稿でのべることにする。

### 【用例の底本】(円朝作品は本文中にしるす)

安愚楽鍋 牛店雑談安愚楽鍋 国立国会図書館蔵本 (復刻=国立国語研究所資料集9牛店雑談安愚楽鍋用語索引, 1974, 秀英出版)

浮雲 新編浮雲(第二篇)金港堂版(復刻=新選名著復刻全集近代文学館, 1973, 日本近代文学館)

坊つちやん 漱石全集 第2巻, 1994, 岩波書店

煩惱の月 饗庭篁村全集, 1928, 春陽堂

明暗 漱石全集 第11巻, 1994, 岩波書店

迷霧 露伴全集 第1巻, 1952, 岩波書店

KUAIWA HEN 1873, YOKOHAMA: LANE, CRAFTORD & CO. (復刻=アーネスト・サトウ著 会話篇I・II 複刻版, 1967, 東洋文庫)

### 【文献】

秋永一枝 2004 東京弁辞典, 東京堂出版

岩本素白 1963 素白随筆, 春秋社

岡鬼太郎 1935 鬼言冗語, 岡倉書房

- 興津 要 1968 落語—笑いの年輪—, 角川書店
- 鏑木清方 1979 鏑木清方文集 二, 白風社
- 小島俊夫 1974 後期江戸ことばの敬語体系, 笠間書院
- 佐藤 亨 1992 近代語の成立, 桜楓社
- 清水康行 1983 言語資料として見た速記本『権談牡丹燈籠』における二重性, 『創立二十周年記念  
鶴見大学文学部論集』
- 1998 速記は「言語を直写」し得たか—若林珺蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性  
一, 『文学』9-1
- 2006 落語と速記と録音と, 『新日本古典文学大系明治編 第6巻 落語・怪談咄集』月  
報21
- 田島 優 1998 近代漢字表記語の研究, 和泉書院
- 田鍋桂子 2005 大槻文彦著『東京須覧具』と『日本辞書言海』, 『早稲田日本語研究』14
- 永井啓夫 1998 新版三遊亭円朝, 青蛙房
- 野村雅昭 1980 落語と江戸語・東京語, 『明治大正落語速記集成 第3巻』月報3
- 2004 明治期落語速記の人称詞と用字意識, 『国文学研究』144
- 2006a 落語のゲス考, 『新日本古典文学大系明治編 第6巻 落語・怪談咄集』月報21
- 2006b ゲスのかんぐり—ことばの背景43—, 『国語教室』83
- 飛田良文 1970 明治初期東京語の指定表現体系, 『方言研究の問題点』(明治書院)
- 1992 東京語成立史の研究, 東京堂出版
- 正岡 容 1957 明治東京風俗語事典, 有光書房
- 文 部 省 1917 口語法別記, 国定教科書共同販売所
- 湯沢幸吉郎 1957 増訂江戸言葉の研究, 明治書院